土曜国語

２０２１年３月
第　４０　号

〈特 集〉
◆第60回政令指定都市中学校国語教育研究協議会名古屋大会に向けて
◆コロナ禍の子どもたち

〔この一言〕
創刊40号「土曜国語」のこれから……竹　内　義　信 …… 2

〔提言〕
「言葉による見方・考え方」を働かせること ……橋　本　吉太郎 …… 4

〔大会に向けて〕
第60回政令指定都市中学校国語教育研究協議会名古屋大会に向けて
……林　　雅　宏 …… 8
「読むことの授業における基本的な考え方」を踏まえた授業構想
……犬　飼　雅　人 …… 14

〔コロナ禍の子どもたち〕
コロナ禍×国語科×楽しもうか（小６）……後　藤　佑　介 …… 20
ピンチをチャンスに変える「コロナ世代」（中３）……清　水　智　子 …… 22

〔実践を語る〕
1　話すこと・聞くこと部会
「話し合いのよさ」を実感できる国語科の学習（小２）…纐　纈　祐　輝 …… 24
2　書くこと部会
自分の考えや思いを自分らしく書くことができる児童の育成（小６）
……廣　瀬　伸　也 …… 30
3　小学校・読むこと部会
言葉による見方・考え方を働かせて実現する深い学び（小４）
……笠　原　誠　康 …… 36
4　言語部会
言語分野における様々な工夫をした実践……古　安　良　啓 …… 42
5　書写部会
生活の様々な場面で書写の学習を生かすことができる生徒の育成（中１）
……小　川　拓　海 …… 46

〔この一冊〕……木　村　理　子・坂　田　哲　也 …… 50

〔教室Ｑ＆Ａ〕 …… 52

〔編集後記〕 …… 56

令和２年度名古屋国語教育研究会のあゆみ …… 62

（題字　河合良昌）

この一言

創刊40号「土曜国語」のこれから

竹内義信
（名古屋市立藤が丘小学校）

一九九一（平成四）年一月十日、ここ名古屋の地で産声をあげた「土曜国語」が、今号で40号の発刊を迎えました。その間、私は1～4号、11～22号の編集委員として、とりわけ3～5号は「教室Q&A」を、13～22号は「特集」を担当させていただきました。また、創刊号では、はんドン「子供を知るということ」、8号では、〈特集1〉作者登場で「あまんきみこの世界 絵本づくり『続々車のいろは空のいろ』」、10号では、〈特集〉「これからの国語教育を考える」の座談会の聞き手、11号では、教材発掘「谷川俊太郎『みみをすます』を読む」、18号では、読者のひろば 木もれび 童話のページ「やまちゃん、空をとぶ?!」、32号では、この一冊「同時代ライブラリー『言葉の海へ』高田宏著」、34号では、〔提言〕「思考力を育む国語科の授業づくり」、そして、39号では、〔提言〕「過程と結果に着目して新学習指導要領（平成二九年告示）を読み返す」を執筆させていただきました。こうして振り返ると、私の国語人としての歩みは、「土曜国語」と共にあったといっても過言ではありません。その分、「土曜国語」への愛着、親しみは、他の誰にも負けないつもりでいます。

ところで、創刊号の編集後記には、次のような記述があります。

・待ちに待った〝名古屋発〟の国語教育の本が誕生しました。〝東京発〟の出版物の多い中で、地方に生きる国語教育の実践が、このように陽の目を見ることができ、感激しています。この本が、国語をこよなく愛する人たちによって育てられ、生き続けることを切望します。（A）

・念願の雑誌が「土曜国語」と、いい名をもらって誕生した。このうえは、この子に、全国各地へ旅に出るほどの力を持ってほしい。そのためには、名古屋の国語人が挙って書き手になること、などと、編集子の欲は際限もなく膨らむ。（S）

・空の乳母車を押した老婆がいく。冬の風が体にさわるのだろう。前かがみになって無言のまま進む。言葉をかける。その時の彼女の明るい顔。「ええ、さぶいでなも」人とのつながりが嬉しいのだろう。言葉の持つ魔力だ。この本にもいい言葉がつまっている。（Y）

・読みながらうなずいたり、二度三度と考えながら読み返したり、思わず笑い声を立ててしまったり…。名古屋には、すばらしい先生方がいらっしゃるんだと改めて思う一冊です。それにしても、編集長のパワーとその仕事の早さには、最敬礼しています。（K）

・編集会議のたびに一人で編集長の学校の近くにある喫茶店に寄る。熱い珈琲をすすりながら、夢を抱く。売れなくてもいい、長く続く雑誌にしたい。国語人だけでない誰かも、手にしてくれる雑誌にしたい……。夢のある仕事人として、夢を売り続けようと思う。（H）

・デキルノカナという声。ツヅキマスカというさやき。悪魔の声がしのび寄る。ままよ。耳を貸すまい。そう覚悟してここまで来た。何とかして読ませる雑誌に、週末のひととき手を取ってみたくなる雑誌に、したい。それだけを願って。おかげでいい原稿を寄せていただき、感謝あるのみ。さて、読んでくださってドウデシタカ？ たずねて回りたい衝動にかられます。（C）

初めて読んだという方がほとんどだと思います。「土曜国語」創刊当時の編集委員のこの熱い思いを、名古屋国語人としての心意気を、どれだけ私は受け止め、どれだけ後進に伝えてきただろう。悔いることばしか見つかりません。

編集会議での発言は、全て直球。厳しい意見が飛び交いました。1号からは、年2回発行、11号からは、新シリーズ「土曜国語辞典」の掲載が決まり、22号まで私が担当しました。予算の限られる中、17号から頁数を増やすとの方針が決まり、執筆者にはデータで入稿いただき、私が全頁の体裁を整えて印刷所に持ち込む方式になりました。21号からは、A4版に。21号・22号では、「土曜国語」初、会員を対象にアンケートを実施し、名古屋の読書活動の実態を明らかにするとともに、実践的提案をしました。

しかしこの後、23号から「土曜国語」が大きく様変わりします。まず、表紙を一新。このデザインは、今も踏襲。発行回数は年1回になり、雑誌というよりは、年報、紀要といった内容、性格の機関誌に生まれ変わります。創刊時、編集委員の方たちが思い描いていた本屋に並ぶ雑誌というコンセプトから、この時、大きく外れます。さらに、二〇〇七（平成十九）年の全国大会を機に、正に鎖国状態、名古屋に特化した、会員向けの機関誌となります。

今後、「土曜国語」はどこに向かっていくのでしょう。可能であれば、もう一度、編集委員として創刊当時の編集委員の意思を継ぎたいと強く思います。